

天使と贈り物



いま 今 ぼくは、あったかい ココアを の
みながら、いどこで 親友でも ある ボ
リス・タグルと いっしょに、レゴの
お城を 建てている。クリスマスに 両
親から もらったものだよ。プレゼン
トを もらったときは あまりにも うれし
くて、つい 逆立ちを して、もう ちょっ
とで クリスマスツリーを たおしそ
う になったくらいだ。クリスマスプレゼ
ントを 開けるのって、最高だよね。そ
こから、ぼくの この話 が 始まるわけ。

ことし 今年の クリスマスは、ぼくにとって わすれられない クリスマスだった。事は、
12月1日に 始まった。

ぼくは 生まれて 初めて、全く 本物 そのものの 天使を 見たんだ！ よく 絵本に え
がかれているような 天使をね。白い きれいな 服を 着て、堂々とした 大きな つばさ
も あったよ。

彼女が 洗面所の 鏡に 現れた時、ぼくは 歯を みがいていた。ふり返ると、
そこに 天使が いて、ぼくに ほほえみかけていたんだ。

「こんにちは。」 彼女は やさしい ささやくような 声で 言った。

「うあ・・・。」 ぼくには それしか 言えなかった。

「ボビー。」――そう、それが ぼくの 名前なんだ。「わたし、天国から あなた
に クリスマスの 任務を 持ってきたの。」 そこで 天使は だまって ぼくの 反応
を 見ていたけど、ぼくが 何も 言わないので、話し続けた。

「天国では 今、イエス様のために 特別な プレゼントを 準備しているの。子
供たちからの プレゼントを 差し上げるのよ。それで、あなたにも 手伝って も
らえればと 思って。

まず、あなたと あなたの いどこ ボリスの 兄弟 みんなから、イエス
様に あげたい プレゼントを 全部 集めるの。その リストを 作って、ク
リスマスに イエス様に 差し出すのよ。もちろん、あなたから イエス様へ
の プレゼントもね。」



ぼくは、この任務に胸をおどらせた。だけど、一つだけ問題があった。「イエス様にあげるプレゼントを手で持つことができないのに、どうやってそれを集めたらいいのかな？」

天使は、金色のペンと、ノートと、皮ひもが付いた鍵をくれた。「しなくちゃいけないのは・・・」と、彼女は説明した。「子どもたちがイエス様にあげているプレゼントのリストを、そのノートに書きこむだけでいい。そうすると、プレゼントは自動的に、特別な贈り物部屋に行くのよ。もしそのプレゼントを『見たい』なら、手に鍵をにぎって、目を閉じるの。あなたは贈り物部屋に転送され、集めたプレゼントを見ることができるわ。それは、この仕事をする人の特権よ。

どう？ この仕事を引き受けてくれる？」

さてと、今考えてみると、「はい」と答えるにも、いろんな返事の仕方ができたなあ。「光栄でございます。」とか、「もちろんでございます。」とか、「わたしにお任せを！」とか、さらには、聖書に書かれているマリヤのセリフみたいに、「わたしの魂は主をあがめます。」なんてね。だけどぼくは、天使が現れたことに未だ口もきけないほどびっくりしていて、ただ首をたてにふることしかできなかった。

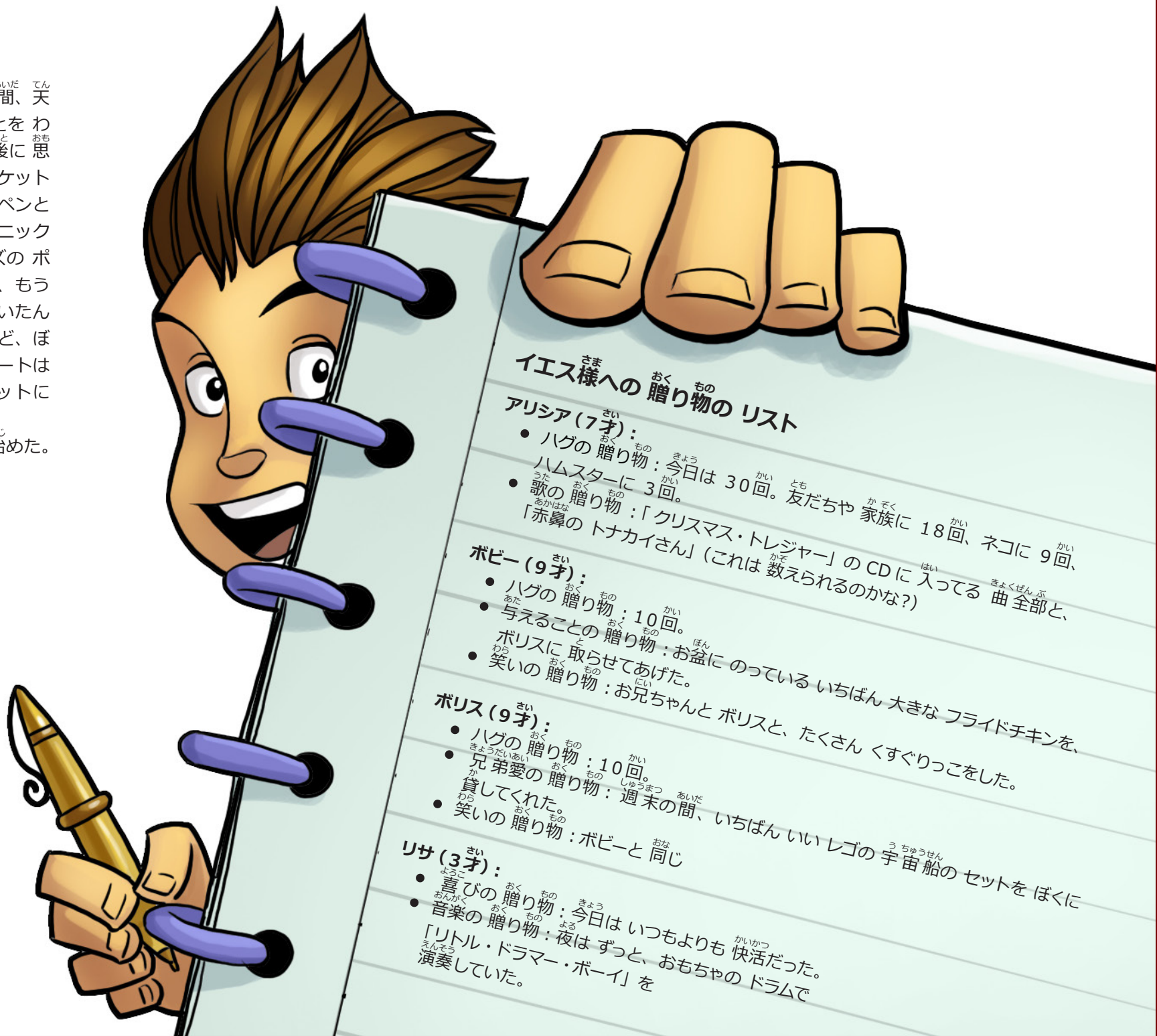
天使はほほえんで言った。「じゃ、クリスマスの日にね。」そう言うと、彼女は消えてしまった。

ぼくは、頭のてっぺんからつま先まで、ぞくぞくしてきた。鍵を首にかけ、ノートとペンをポケットにおしこんで、ベッドに向かった。



翌朝 起きた 時は、ちょっとの間、天
使の ことや もらった 任務の ことを わ
すれていたけど、服を 着替えた 後に 思
い出し、あわてて パジャマの ポケット
の中を さがしに行った。でも、ペンと
ノートは なかった！ ぼくは パニック
し始めた。だけど、ふと ジーンズの ポ
ケットに 手を つっこむと、何と、もう
そこに、ペンと ノートが 入っていたん
だ。後で わかった ことなんだけど、ぼ
くが 服を 着替えると、ペンと ノートは
いつも、ぼくが 着た 服の ポケットに
うつ 移っているんだ。

その朝、ぼくは リストを 作り始めた。
最初の ページを 見せてあげよう。



イエス様への贈り物のリスト

アリシア(7才):

- ハグの贈り物: 今日 30回。友だちや 家族に 18回、ネコに 9回、ハムスターに 3回。
- 歌の贈り物: 「クリスマス・トレジャー」の CD に入ってる 曲 全部と、「赤鼻のトナカイさん」(これは 数えられるのかな?)

ボビー(9才):

- ハグの贈り物: 10回。
- 与えることの贈り物: お盆にのっている いちばん 大きな フライドチキンを、ボリスに 取らせてあげた。
- 笑いの贈り物: お兄ちゃんと ボリスと、たくさん くすぐりっこをした。

ボリス(9才):

- ハグの贈り物: 10回。
- 兄弟愛の贈り物: 週末の間、いちばん いい レゴの 宇宙船の セットを ぼくに 貸してくれた。
- 笑いの贈り物: ボビーと 同じ

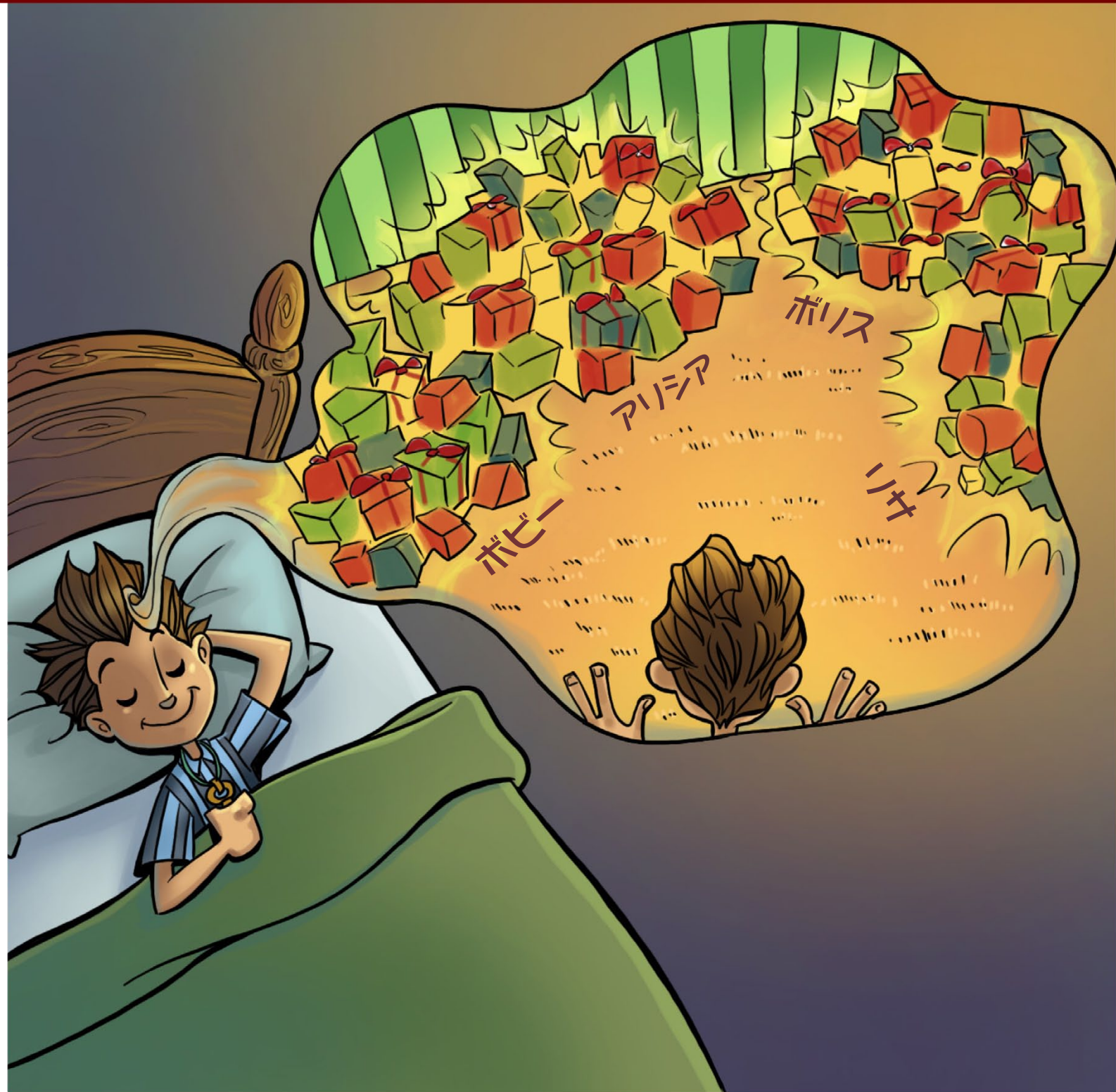
リサ(3才):

- 喜びの贈り物: 今日 10回。
- 音楽の贈り物: 夜は ずっと、おもちゃの ドラムで「リトル・ドラマー・ボーイ」を 演奏していた。

ざっと、こんな感じだ。夜にはベッドに入^{はい}って鍵^{かぎ}をしっかりとにぎり、目を閉^めじた。大きな部屋^{へや}が見えてきた。壁と天井^{てんじょう}は、木のパネルでできている。まるで、杉の森^{もり}にいるようなにおい^{におい}だ。床にはやわらかいカーペットがしかれている。暖^{あた}かくて、プレゼントから出^でてくる光^{ひかり}で部屋全体^{へや ぜんたい}が明るく照^あらされていた。部屋の各^{おの}すみにはプレゼントが積^つまれていて、その下^{した}のカーペットには、名前^なが織^おりこまれていた。「アリシア」、「ボビー」、「ボリス」、「リサ」とね。

その部屋^{へや}には、あらゆる種類^{しゅるい}のプレゼントがあ^あった。箱^{はこ}に入^{はい}ったのもあれば、紙^{かみ}で包^{つつ}んでリボン^{りぼん}をかけてあるのもある。包^{つつ}みや箱^{はこ}には、ピカピカしたのや、もよう入^いりのもある。ぼくは思^{おも}った。(うわあ！ クリスマスまでに、この部屋^{へや}をいっぱい^{いっぱい}にできるかなあ。)

ぼくたちは週末^{しゅうまつ}、クリスマス^{よるこ}の喜^{よろこ}びを伝^{つた}えるために、しばしば外^{がい}出^{しゅつ}した。ホテルやコンサートホールや児童^{どうよう}養^{やし}護^ご施設^{しせつ}や老人^{ろうじん}ホームで歌^{うた}を歌^{うた}い、パフォーマンスをひろ^{ひろ}うした。ぼくは、多^{おほ}くの時間^{じかん}を費^{つい}やしてこのノートに書^かきこんでは、夜^よな夜^よな贈^{おく}り物^{もの}のたま^{たま}った部屋^{へや}を見^みに行^いった。プレゼントの山^{やま}は大き^{おお}くなっていったけど、部屋^{へや}も大き^{おお}くなっていった。だから、いつもも^あっと空^あきがあ^あった。



いっしゅうかん
1 週間ほど たつと、どの プレゼントが 何を 表しているのかの 区別が つくよう になった。

- ハグの 贈り物は、みんな クッションのように やわらかくて、さわると 暖かい。
- 笑いの 贈り物には 曲がりくねった もようが ついていて、実際には ね回るんだ。
- 音楽の 贈り物は 左右に ゆれ、いつも 3~4 色から 成る 包み紙で 包まれていた。
- 1 2 月も 中ごろになると、イエス様を 知るよう になった 人たちの 贈り物は いよいよ 山積みになり、包み紙は 純白、リボンは 金色で キラキラ 輝いていた。
- 何の 贈り物か わからないのも いくつか あったけど、とにかく きれいな ものばかりだ！ 今年 ぼくたちが イエス様に あげている 贈り物を見たら、天使は きっと、喜んでくれる だろうな。

ところで、この ながめは きれいなんだけど、ぼくが 両手を あげて 喜ばない、気がかりな ことが あった。考えないように しているんだけど、クリスマスの 最後の 週になると、ぼくは ますます 落ち着かなくなってきた。

問題とは、こういう ことだ。

アリシアは 今のところ、イエス様のことを 話した 人たちの 贈り物を いちばん 多く 集めている。どうしてかは わからない けど、アリシアが 人々に ほほえみかけて、イエス様が 最高の 友だちで、どんなに 幸せかを 話すと、ほとんど いつも、人々は 熱心に 耳を 傾けるんだ。それで、最終的に この 贈り物は 何 百にも なった。アリシアの 贈り物の 山は、まばゆいばかりの 純白に 輝いている。

そして、ボリスの 贈り物の 山はと いうと、カラフルで、まるで 生きているかのように、荒々しく はね回っているんだ。彼は いつも 笑っていて、他の人も 笑わせるからね。パフォーミング している時は 歌が すごく うまくて、人々は 感動して なみだま で 流すくらいだ。それに、彼は いつも カードを 作ったり 絵を かいたりして、人に あげている。彼は、人々を 幸せにする コツを よく 知っているんだ。彼の 贈り物は、まるで カラフルな クリスマスの ライトの 山が おどっているみたいだ。



くら 比べるべきではないと、自分には 言い聞かせている。
結局のところ、これは 全部、イエス様へのプレゼントな
んだものね！ 自分の 贈り物の 山に すごく ヘンな こと
が なければ、ぼくも 気には しなかっただろう。2 週間
くらい たって 気づいたんだけど、イエス様を 知るようにな
った 人々を表す 白い 贈り物や、道化師のような 笑いの
贈り物や、やわらかい ハグの 贈り物の ほかに、ぼく
には 茶色の 包みが あった。かざり気のない 茶色の 包み
紙を ひもで しばっただけの 贈り物だ。

クリスマスが 近づくにつれ、ぼくは もっと たくさんの
新しい 人たちに イエス様の 話を し、もっと たくさんの
人を ハッピーに しようと がんばったんだけど、アリシ
アは いつも、ぼくよりも たくさんの 人たちに イエス様
のことを 話し、ボリスも、いつも ぼくより 上手に 歌っ
た。毎晩 ぼくが プレゼントを 見に行くと、ぼくには もっ
と たくさんの 茶色い 包みが 増えていた。次の日には もっ
と 良い 贈り物を イエス様に あげられるようにと 一生 け
ん命 祈りながら、ぼくは 眠りについた。だけど、状 況
は 変わらなかった。ぼくは 自分の プレゼントが どうし
て そんなに 地味なのか、どうしても わからなかった。

クリスマスの 最後の 日だ。ぼくは ふさぎこんでいた。
夜が 来て、ぼくは ベッドに 横になって 鍵を にぎり、目
を 閉じた。決心したぞ。ぼくの プレゼントは、代わりに
天使に 渡してもらおう。あんなに さえない 茶色の 包み
が たくさん あるのに、それを 自分で イエス様に 渡すな
んて、とても できないよ。

贈り物の 部屋が 見えてきた。天使が 真ん中に 立っ
ている。そして、飛び回りながら、プレゼントを 確認して
いた。

「メリークリスマス、ボビー。」と 天使が 言った。「贈り
物を 渡す 時が 来たわね。」

「待って。ぼく・・・」 まだだ。説明する 言葉が 出
てこない。天使は しんぼう強く 待っている。「あのう・・・
ぼくの 代わりに、プレゼントを イエス様に 渡してもらえ
ませんか？だって・・・」 ぼくは 自分の プレゼントの
山に 目を やった。「地味で つまらないでしょう？」



天使は ぼくの 贈り物の 山を 見て 言った。「ボビー、茶色の プレゼントが 何だか、わかる？」

「わかりません。」と ぼくは 答えた。「ぼくの リストと 合いそうな ものが 何も なかったんです。」

「そう。」 天使は 言った。「わたしにはね、自分の 特別な リストがあるの。あなたは、お友だちが イエス様に あげている プレゼントを 一つも 見落とさないように、とても 注意深く 記録を つけていたでしょ。あなた自身の、イエス様のもとに 勝ち取った 人たちや 笑いの 贈り物もね。だけど、あなたが あげた とても 大切な 贈り物を、いくつか 書きのがしていたわ。」

「でも、どうしてそれが 茶色の 包みなんですか？」と ぼくは 聞いた。

「それは みんな、あなたが 記録しなかった 分よ。だけど、それを 見落としてほしくは なかったの。さあ、プレゼントを イエス様に 差し出す 前に、ちょっと 見させてあげるわ。」

天使は ぼくに リストを 渡し、ぼくは それを 読み上げた。

ボビーから イエス様への 思いがけない 贈り物：

- 1か月間、忠実に、かつ 正しく、贈り物の リストを記録した。
- 1か月間、ほとんど 毎日、アリシアが パフォーマンス用の バッグを 見つけるのを 手伝ってあげた。
- 1か月間、パフォーマンスに 出かける 時に、ボリスに バンの 窓側に すわらせてあげた。
- 1か月間、食事の時に リサの お皿を よそってあげた。
- 1か月間、・・・



リストは、まだまだ 続いていて。そして、読み上げながら 贈り物の 山を 見ると、茶色の 包み紙の 中身が 見えた。それは・・・ 何と・・・すごい！

ぼくは 天使の方に ふり返って 言った。「やっぱり ぼく、自分で 行けると 思います。」

「わたしも そう 思うわ。」と 天使は 言った。

イエス様が すわっている 王座の 前に 立ち、リストを 顔の 真ん前に しっかりと つかんで、ぼくは どもりながら 言った。「イ、イエス様、お、おたん 生 日 おめでとうございます！ タグル家の 子どもたちからの 贈り物を ささげます・・・」

その後 何が 起きたかは、言えないよ。だって、うれしなみだやら、そういった 照れくさいことだから。でも、今は わかるでしょ。今年の クリスマスが、どうして そんなに わすれられない ものだったのか。

やっぱり、ああいう プレゼントを イエス様に あげることの ほうが、レゴのお城を もらったり、ココアを 飲んだりする ことなんかよりも、ずっと ステキだな。まあ、レゴも 悪くは ないけどね。

